

今、教育委員は！

平成28年2月

教育委員 青柳 淳

3つ褒めて、2つ叱る

先日、信毎のコラムに秋山仁さんが書いていました。褒めるべきことは褒め、叱るべきことは叱るという、バランスの良い子育てを大切にしたい、と。そして、二宮尊徳の言葉を紹介しています。

可愛くば五つ教えて三つ褒め 二つ叱って良き人となせ

近年、「褒める子育て」ということが言われ、“子どもはひたすら褒めればよい”とか“子どもを叱ってはいけない”という極端な子育て論が影響力を持っています。褒められてばかりで甘やかされて育った人間がどうなるかは、徳川家の将軍たちや、歴代中国の皇帝に多くの事例を見出すことができます。人間育成の失敗事例です。

近年、会社でも役所でも、「うっかり若い社員を叱れない。叱ると落ち込んでやめてしまうことがある」という嘆きを聞きます。褒められてばかりで育つと、傷つきやすいひ弱な人間になってしまいます。褒めることと叱ることをバランスよく行うことが大切であろうと思います。

【教育委員会の動き】

1 臼田地区新小学校、候補地の検討すすむ

昨年1月、臼田地区4小学校を1校に統合することを決定しました。

臼田地区小学校施設整備検討委員会（以下、検討委員会）では、どこに新小学校を建設するか検討してまいりました。4候補地「あいとびあ臼田の東側」「青沼小学校及び周辺」「コスモホールの西側」「臼田小学校」のいずれにするか、精査を重ねております。

「安全性」「環境」「まちづくり・地域づくり」「通学」「経済性・工事の円滑性」の5つの観点から、グループ討議、全体討議を経て4候補地について評価をしています。検討委員会による建設候補地1箇所の選定、教育委員会による建設地の決定へ向けて、鋭意作業を進めております。



2 理科教育の充実、そして主体的な学びの創造へ

来年度に向けて、小学校における理科専科教員や理科支援員の配置について、予算措置などを前向きに検討しております。これは、実験や観察など課題探究的な性格の強い理科教育の強化を目指すものです。そして、そのことを契機として、すべての教科、子どもたちのすべての生活にわたって、より主体的な学びを波及させていくことをねらっているものです。

平成 27 年度佐久市ふるさと創生人材育成事業「中学生海外研修報告書」の中に、主体的な学びの成果をみることができました。モンゴル研修に行った望月中の長谷川美和さんは、出発前に、「言葉が通じない相手とコミュニケーションをとる方法」を、課題の一つとして考えていました。そして、モンゴルでの成果を、次のように記しています。

「最初言葉も通じなくて、英語でしゃべっていたけど、だんだん日を重ねるごとにコミュニケーションがとれていって、とても楽しく過ごすことができました。言葉は通じなくても、ちゃんと伝える気持ちがあれば、通じることがあるのに気付き、とてもうれしくて感動しました。」

主体的な学びは、学習指導要領においても、根幹に据えられています。ところが、日本社会では、KYなどという言葉が流行していることにみられるように、主体性を放棄して周りに同調する傾向が強くみられます。しかし、子ども達は、これからの国際社会において、自ら考え判断し行動していかなければなりません。自主的・自立的な人間として育ていく必要があります。そのために、主体的な学びはその基礎となるものです。大切にしていきたいと考えています。



3 不登校を克服するために

学校へ登校できないということはつらいことです。長野県内の不登校率は、全国と比較し、小学校においてやや高い状況にあります。平成 26 年度の数字で見ますと（カッコ内は全国）、在籍比で、小学校 0.47(0.39)%中学校 2.62(2.76)%高校 1.12(1.59)%となっています。

不登校の原因はさまざまですが、特に、近年、貧困や家庭崩壊による深刻な不登校の事例が増加する傾向にあります。憂慮すべき事態です。

不登校の原因は、それぞれの子どもによって異なるため、原因を明らかにし、的確な対応をとる必要があります。「見立て」が大切だといわれます。本人、家庭や学校の努力は、すぐに現れなくとも、徐々に効果を表します。家庭や学校の努力が実ったせいでしょうか、上の学校へ進学することによって、すっかり解決してしまった事例も数多くあります。

各学校の取り組みを応援すべく、佐久市教育委員会においても、野沢会館の中間教室、スクールメンタルアドバイザー（6名）・ハートフルフレンド（3名）の配置など、不登校解消に向けて、様々な取り組みを行っています。

4 スマホ依存を考えよう！

去る1月31日、佐久市民創錬センターにおいて、ネット被害やスマホ・ゲーム機器依存を子どもと共に考える会が発足しました。

柳田市長、榑澤教育長をはじめ、小中学校PTA代表及び各界代表約30人が集合しました。会長には岩村田小学校PTA会長の角森和士もりかくまさしさんが就任し、会の名称を「Saku

Kids メディア Safety ～子どもと話そうメディアとの上手な付き合い方～」としました。

3つの小グループに分かれて、討議が行われました。その中では、次のような意見が出されました。

「ネット・スマホ依存が進んだ結果、子どもの心に変化が起こっているのではないか。現実とヴァーチャルの差がなくなるという、精神構造の変化をもたらしているのではないか。子どもの時期にこそ、話す・汗をかく・遊ぶといった人間らしい活動が必要である。手はかかるが、この時期にこそ、ふれあいの大切さを大事にしたい。

小さいうちなら何とかできるので、自ら考え判断する力をつけてやりたい。講演会などの啓発活動を進め、自分の責任で情報機器を取り扱えるような力をつけてやりたい」。

また、2月21日には、NPO法人チャイルドライン支援センター代表理事である清川輝基きよかわてるもと氏による講演が行われました。小さい時からの電子メディア漬けの生活が、親子の愛着の切断、子どもの体力・視力の低下、生命感覚のゆがみを生み出している。親は発達途上の子どもとどう向き合うか、生活を見つめ直してほしい。現在の深刻な状況とその解決の方向性が、科学的根拠と豊富な具体的事実を基に語られました。



これらの話し合いや講演、更には今後の取り組みを通して、ネット・スマホ依存から抜け出す道を探っていくことができればいいな、と考えております。